

私

たちにとって馴染みの深い魚、サケ。北海道に住んだらトガリネズミと同じくらい、とことん撮影したいと思っていた生き物です。今回はそのサケのお話し。

毎年秋、

奇跡が起こっているようなもの

川で生まれて海で育った後、故郷の川へ帰ってくるサケの習性。多くの人が知っていることですが、よくよく考えたらすごいことです。サケの子どもたちは生まれた川を降りた後、ベーリング海やアラスカ湾などの外洋で大きく成長し、再び日本の川へ戻ってきます。その全行程は約4年間、移動距離にして1万6千キロ以上にもなると言われています。その間、天敵に食べられず、漁師に捕まらず、病気になるず、生き残るのです。その確率は北海道では約3%と言われています（これは養殖して放流した稚魚のデータなので、自然下で生まれた稚魚が生まれた川に戻る確率はさらに低い）。毎年秋になるとあちらこちらの



生まれ故郷の川の河口に到着したサケの群れ



産卵の直後、アメマスに卵を食べ尽くされる

トガリネズミラヴァー
六田晴洋の
私たちの
ご近所さん



VOL. 6

「サケの壮絶な旅」

川で見られるサケの群れ。ついでに前のように見てしまいがちですが、その一匹一匹が壮絶な旅をしてきたと思うと、尊敬の念さえ抱いてしまいます。

厳しい自然の掟

なぜサケがわざわざ生まれたい川に戻ってくるかと言うと、それは繁殖のためです。傷だらけになりながら、ときにはクマやワシに襲われながら産

卵に適した場所を目指します。日本に帰って来てはまだ、過酷な旅は続くのです。2枚目の写真は、メスが卵を産んだ直後。撮影をしながら「良かったね」と思ったのも束の間、次の瞬間、大量のアメマスが群がり、あっという間に卵を食べ尽くしてしまいました。通常、サケのメスは川底に産卵し終わるとすぐに砂利をかけて卵を隠すのですが、それさえも間に合わない一瞬の出来事でした。メスが砂利をかける始める時には、私の見える範囲には一粒の卵も残っていませんでした。やっこのことで生まれ故郷に戻ってきたサケのうち、次の世代へ命をつなぐことができる者は、果たしてどれほどいるのだろう。自然界の厳しさをまざまざと見せ付けられました。

PROFILE
六田晴洋

ろくたはるひろ 1986年生まれ。2021年に白糠町へ移住。大学卒業後、フリーランスのカメラマンやディレクターとして野生動物や自然風景を撮影している。
E-mail rokuta@six-h.com